

てんとう虫のおじょうさん

昔むかし、あつたとき。

あるところに、てんとう虫のおじょうさんがいました。

ある日、てんとう虫のおじょうさんは、お嬢さんが欲しくなって、お嬢さんになる人さがしにでかけました。

何カ月たったか、何日たったか、どんなに遠くまで歩いてきたのか、てんとう虫のおじょうさんにはわかりません。広い草原を歩いていると、牛飼いに会いました。牛飼いがたずねました。

「おや、てんとう虫のおじょうさん。どこへ行くの」

「お嬢さんをさがしに行くの」

「お嬢さんが欲しいんなら、ぼくがいいよ」

「そうね、あんたをお嬢さんにしようかしら。でも、あんた怒ったら、何で私をぶつつもり」

「ほら、牛を追うこのついで」

てんとう虫のおじょうさんは、つんとすましていいました。

「あたしは黄色いくつをはいてるわ。あたしはきれいよ。お花のような服も着ているわ。あたしはきれいよ。あんたにぶたれるくらいなら、犬のお嫁さんになったほうがましよ」そして、どんだん歩いていきました。

どんなに遠くまで歩いてきたのか、てんとう虫のおじょうさんには、わかりません。ひと休みしていると、羊飼いに会いました。羊飼いがたずねました。

「おや、てんとう虫のおじょうさん。どこへ行くの」

「お嬢さんをさがしに行くの」

「お嬢さんが欲しいんなら、ぼくがいいよ」

「そうね、あんたをお嬢さんにしようかしら。でも、あんた怒ったら、何で私をぶつつもり」

「ほら、羊を追うこのついで」

「あたしは黄色いくつをはいてるわ。あたしはきれいよ。お花のような服も着ているわ。あたしはきれいよ。あんたにぶたれるくらいなら、犬のお嫁さんになったほうがましよ」てんとう虫のおじょうさんはそういって、さっさと歩いていきました。

どんなに遠くまで歩いてきたのか、てんとう虫のおじょうさんには、わかりません。どんだん歩いていくと、ねずみのだんなに会いました。

「おや、てんとう虫のおじょうさん。どこへ行くの」

「お嬢さんをさがしに行くの」

「お嬢さんが欲しいんなら、ぼくがいいよ」

「そうね、あんたをお嬢さんにしようかしら。でも、あんた怒ったら、何で私をぶつつも

り

「あんたをぶつなんて、とんでもない。しつぽで、くしゅくしゅって、くすぐってあげるよ。いごちのいい壁のくぼみに座らせて、おいしいものを食べさせてあげる」

そこで、てんとう虫のおじょうさんは、ねずみのだんなをお婿さんにしました。ねずみのだんなは、てんとう虫のおじょうさんを壁のくぼみに座らせて、ごちそうやら、パンやら水やらをせつせと運んでかわいがりました。

ある日、てんとう虫のおじょうさんは、ひとりで川に出かけていきました。そして、橋の下で、どろに足をつっこんで動けなくなっていました。そこへ、馬に乗った人間たちが、橋を渡ろうとやって来ました。けれども、馬がてんとう虫のおじょうさんを恐がって、どうしても橋を渡ろうとしません。

てんとう虫のおじょうさんは、馬乗りの人たちにいいました。

「ハイハイ、ドウドウの馬乗りさん。

馬を引きかえてちょうだい。

あたしはもう死んじゃうわ。ああ。

このこと、ねずみのだんなにはいわないでね」

馬乗りたちの中に心のやさしい人がいて、このことをねずみのだんなに知らせてやりました。ねずみのだんなは、大急ぎでとんできて、てんとう虫のおじょうさんを救いだししました。

そののち、てんとう虫のおじょうさんとねずみのだんなは、ずっと橋の下に住んでいきます。なんととっても、水に近くて便利ですからね。

おしまい

原話…『シルクロードの民話ウズベク』池田香代子訳／ぎょうせい  
再話…村上郁◎